

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770004

研究課題名(和文) 道德直観の心理学から認識論へ

研究課題名(英文) Moral Intuition: Psychological Underpinnings and Epistemological Inquiries

研究代表者

太田 紘史(Ota, Koji)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：80726802

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、道德直観についての心理学的知見が、道德直観の信頼不可能性を結論づけるようなインパクトを持っているのかを見定めることを目的とする。この研究を通じて、道德直観の操作によって影響を受ける判断生産プロセスは行為表象を入力とした処理を行っているという説明を提案すると同時に、道德認識論において想定されてきた直観の種類を分類し、それが心理学的研究における直観とどのように対応するのかを明らかにした。さらに、道德的責任についての判断の入力となる自由意志の表象が、行為者性と他行為可能性の表象によって構成されていることを明らかにし、新たな実験研究のための理論的基礎づくりと尺度開発を行った。

研究成果の概要(英文)：In this study we investigated an epistemological suspicion that moral intuition might be unreliable since various experimental studies have shown instability of intuitive moral judgments. We explained those kinds of unreliability by appealing to the fact that our moral intuition involves complex representational processing which takes representations of actions as input. This sort of processing can be contrasted some kind of intuition assumed by contemporary moral intuitionist ethics. This consideration was extended to experimental scaling of judgments of moral responsibility and free will, which specified that the componential representations of free will as input were alternative possibility and agency.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：道德直観 道德心理学 道德認識論 道德的責任 自由意志

1. 研究開始当初の背景

最近の道徳心理学の研究によれば、直観的な道徳判断は、情動状態や刺激呈示順序など、様々な心理的な要因やその操作によって干渉される。

例えば、ある有害行為がどれくらい悪いものかどうかという判断は、そういった要因や操作によって変化することが報告されている。そうした操作や要因の種類は多様であり、また当の判断内容に対して正当化の基礎を与えるようなものとしては、一見理解しがたい。

一部の哲学者らは、このような経験的事実を重視し、それが直観的な道徳判断の信頼可能性を損なわせるものだと提案している (Sinnott-Armstrong 2008 etc)。とりわけそれは、道徳直観を倫理学理論構築の部分的な基礎として用いるような道徳認識論、すなわち認識論的な直観主義にとって問題になるという批判的見解である。この見解は、すでに直観主義への心理学的な批判として定着しつつある。

これは、直観主義に対して近年提唱されてきた進化的暴露論証とは本質的に異なるタイプの批判である。進化的暴露論証によれば、人間の道徳直観は進化的適応の産物である。それゆえ、道徳的真理を追跡するような仕方ではチューニングされているわけではなく、信頼可能ではないという (Singer 2005; Greene 2008)。

これに対して目下の直観主義への批判は、道徳直観が不安定であり道徳無関連要因によって左右されるという事実のみ焦点を合わせる点で、進化的暴露論証とは根本的に異なる根拠からの批判を提供するものだとと言える。

これに対しては、直観主義の擁護者から様々な仕方では反論が行われてきた。ただし道徳認識論におけるそうした議論の多くは、直観的判断が諸々の心理的な要因や操作に可感的であるという知見のみを想定しており、その背後にどのような心理プロセスが介在しているのかということは注目されてこなかった。

本研究では、そのような心理プロセスの内実に着目し、道徳直観が信頼不可能性であるとしたらそれは当該心理プロセスのどのような部分に起因するのかを検討したうえで、直観主義への批判を再検討する。

2. 研究の目的

本研究では、道徳直観の心理学的本性にまつわる経験的知見の具体的な知見が、道徳直観の信頼不可能性を結論づけるほどのインパクトを持っているのかどうかを見定めることを目的とする。

またそのために、道徳直観の背後にある心理的プロセスがどのようなものかを検討し、

そうした信頼不可能性とされるものが当該プロセスにとって構成的な要因に起因しているのか、それともそれにとって外的な処理の信頼不可能性に起因しているのかを明らかにする。

これに当たって、以下三点の下位目的を設定する。

第一に、道徳直観の心理学的な背景を特定するために、経験的な道徳心理学において直観的判断がどのように操作されているのかについて、またそこで直接的に操作されるのは、道徳直観の入力情報なのか出力様式なのか、あるいはそれらを媒介するプロセスなのかについて検討する。

第二に、それが既存の道徳哲学理論とどのような側面において概念的な接点を持つのかを明らかにするとともに、経験的研究における道徳判断の指標化が道徳哲学理論の観点から妥当であるかどうかを明らかにすることを旨とする。

第三に、そうした接点を特定しながら、その知見が道徳的責任にまつわる判断に応用できるかどうかを試みる。とりわけ、道徳的責任にとって重要な条件とされる自由意志に関する判断との関連に焦点を合わせた研究を行う。

3. 研究の方法

第一に、道徳直観の心理学的な本性についての検討を行う。まず、道徳直観の概念を、直観的判断を生産するプロセスと、そのプロセスによって生産された判断の二つに分類し、経験的な道徳心理学の知見のそれぞれがどちらの意味での道徳直観に関わっているのかを明らかにする。

本研究ではとりわけ、言語表現の操作・刺激呈示順序の操作 (Petrinovich & O'Neil 1996 etc)・情報の抽象性/具体性の操作 (Nichols & Knobe 2007 etc)・気分の操作 (Valdesolo & Desteno 2006 etc)によって左右される道徳直観が、どちらの意味での道徳直観に関わっているのかを明らかにする。とくに、言語表現、呈示順序、気分の操作については社会心理学分野の研究からの知見を参照し、抽象性/具体性の操作については主に実験哲学分野の研究からの知見を参照する。

第二に、そうして明らかにされる二つの意味での道徳直観が、どのような意味で信頼不可能であると言えるのか、そしてそれが道徳認識論としての直観主義をどのような仕方では棄却しうるのかを明らかにするための検討を行う。

またこの検討にあたっては、とりわけ道徳認識論における直観主義の諸形態、とりわけ W・D・ロス (Ross 1930) の理性主義的な直観主義と近年の感情主義的な直観主義 (Prinz 2007) に焦点を合わせ、それらにお

いて直観概念がどのような認知的役割を果たすのかを明らかにしながら、心理学的知見と認識論的知見の接続点を明らかにする。

第三に、道徳直観に関する具体的な事例として、道徳的責任と自由意志に関する判断に焦点を合わせた研究を行う。とりわけ、責任判断の入力となる自由意志信念を構成する心理的要因を明らかにするための基礎研究を行う。

この研究にあたっては、自由意志信念の社会心理学的研究を専門とする研究者との協働を行いながら、哲学的な自由意志論の観点を踏まえた概念的考察を行う。

4. 研究成果

第一に、道徳直観について次のような理論的説明をつくりあげた。道徳直観と呼ばれてきたものには、直観的判断と判断を形成するプロセスの両者が含まれており、言語表現の操作・刺激呈示順序の操作・情報の抽象性/具体性の操作は、当該のプロセスへの入力表象を変容させることによって、それから生産される直観的判断を左右する。

とりわけ言語表現・呈示順序による道徳直観の操作においては、判断対象となる有害行為の有害性が、善い結果のための手段であるのかそれとも単なる副作用であるのか関わっている。これは表象された行為の因果構造の差異としても理解でき(Wiegmann & Waldmann 2014)、因果認識と道徳直観のあいだの理論的な接点を明らかにすることもできた。

このように、表象された因果構造の差異が人間の社会的認知にインパクトを持つことは他の様々な研究からも示唆されており、本研究の成果はそうした研究の知見を再検討し新たな研究を展開していくうえでも意義を持っていると言える。

また抽象性/具体性による道徳直観の操作においては、そもそも行為を「特定の行為」といった仕方で表現するか、何らかの具体的な特徴を持った仕方で表現するか(例えば暴行)が重要になっている(c.f. DeBrigard et al. 2008)。これもまた、呈示された行為についての心的表象を変容させるのであって、それを入力として処理するプロセスそのものに干渉しているわけではない。

以上の成果は、学会発表、図書において発表された。

第二に、道徳直観を生産するプロセスを、情動的反応を主要な構成要因とするタイプのもの、無意識的推論を主要な構成要因とするタイプのものとして分類し、それらが道徳認識論において想定される感情主義的な直観(Prinz 2007)と理性主義的な直観(Ross 1930)に対応することを明らかにした。そのうえで、直観的判断を生産するプロセスの

力となる行為表象が、行為にまつわる概念の能力を反映しているのか、それとも運用上のエラーにすぎないのかについて検討を行った。

また、同様の分析が直観的判断の生産プロセスそのものにも適用可能であることを示した。とりわけ、様々な心理的操作によって信頼不可能であると結論づけることができるのは、当該のプロセスそのものではなく、むしろプロセスの入力表象を形成する過程であることを明らかにした。

以上からの結論として、直観的な道徳判断は、入力に応じた規則的な変化パターンを示しており、そうした規則性を道徳無関連要因による干渉だとみなすのは特定の規範倫理学的主張を前提するものでしかなく、それゆえ既存の心理学的知見は道徳認識論としての直観主義への批判的論証の基礎としては有効なものではないと結論づけた。

さらに信頼可能性についての道徳認識論的検討を行うために、直観的判断の信頼不可能性とされるものを、(1)判断が相互に不整合であることと(2)判断を形成するプロセスが道徳無関連要因に可感的であるということの二点に分け、それらを個別に検討したうえで、どちらの意味での信頼不可能性も経験的知見からは示されていないと結論づけた。

最後に、W・D・ロスの多元論的な直観主義の視点からの検討を行った結果、道徳直観の研究でしばしば指標化される功利主義的判断と義務論的判断という二分法的な分類は必ずしも妥当なものではないことを結論づけた。これは道徳直観の神経基盤を特定しようとする経験的研究(Green et al. 2004 etc)についても当てはまるものである。

以上の成果は、雑誌論文、学会発表、図書において発表された。

第三に、道徳的責任と自由意志に関する判断が人びとにおいてどのような仕方で生産されているのかを明らかにするため、社会心理学と実験哲学からの知見の包括的サーベイを行うとともに、自由意志信念を測定する心理学的尺度研究を行った。

これを通じて明らかにしたこととして、責任判断の入力となる自由意志の概念は、他行為可能性(alternative possibility)と行為者性(agency)から構成されており、それは哲学的な自由意志論において探求されてきた自由意志の概念に概ね対応するものであった。

さらに、自由意志信念を指標化するための尺度研究として、Free Will & Determinism Scale (FWDS)(Rakos et al. 2008)の日本語版尺度の作成を行った。これにあたっては、一般的な自由意志信念と個人的な自由意志信念の区別を明確にした仕方で尺度を作成することに成功した。

これらの成果は、道徳心理学が道徳認識論

だけでなく、自由意志論に対する進展に対してもインパクトを持つものである。とくに、実験哲学における自由意志概念研究と社会心理学における自由意志信念研究のあいだの方法論的な共通点と微妙な差異を明らかにすることに貢献しており、これからは今後のさらなる経験的な道德直観の研究への展開も期待される。

以上の成果は、雑誌論文、学会発表において発表された。

以上の通り本研究を通じて、道德直観の心理学的知見とそれにまつわる認識論的問題が連関する論理を明らかにすることができ、さらに自由と責任の概念についての実験的研究の展開への基礎作りをすることに成功した。

またこれらの知見を雑誌論文・学会発表・図書という形式で発表することができ、二年間という研究期間に照らして、成果発表という点でも相応に充実したものになったと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

渡辺匠, 松本龍児, 太田紘史, 唐沢かおり 「一般的・個人的自由意志尺度 (Free Will and Determinism Scale; FWDS) 日本語版の作成」, 『パーソナリティ研究』, 24(3): 228-231. 2016年。(査読あり)

渡辺匠, 太田紘史, 唐沢かおり 「自由意志信念に関する実証研究のこれまでとこれから: 哲学理論と実験哲学、社会心理学における問題整理」, 『社会心理学研究』, 31(1): 56-69. 2015年。(査読あり)

Iijima, K. and Ota, K. 'How (not) to draw philosophical implications from the cognitive nature of concepts: The case of intentionality', *Frontiers in Psychology*, 5: 799. doi: 10.3389/fpsyg.2014.00799. 2014年。(査読あり)

[学会発表](計 4件)

太田紘史 「道德判断の心理学と倫理学」,

日本心理学会第79回大会, 名古屋大学, 9月24日, 2015年。

太田紘史 「認知哲学から見る批判的思考と合理性」, 日本科学哲学学会第47回大会ワークショップ『クリティカルシンキングと合理性』, 南山大学, 11月16日, 2014年。

太田紘史 「自由意志の実験哲学の展望」, 科学基礎論学会秋の研究例会ワークショップ『自由意志と道德的責任を帰属する心理』(オーガナイザー兼担), 東京大学, 11月1日, 2014年。

太田紘史 「道德直観の心理学は倫理学に何をもたらすか」, 日本哲学会第73回大会ワークショップ「道德心理学の最前線」(オーガナイザー兼担), 北海道大学, 6月29日, 2014年。

[図書](計 1件)

太田紘史 「道德直観は信頼不可能なのか」, 春秋社, 太田紘史 編著 『モラル・サイコロジ: 心と行動から探る倫理学』所収, 近刊。

[産業財産権]
出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 紘史 (Koji Ota)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号: 80726802

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：